石川・七尾城下町遺跡

1　所在地　石川県七尾市古屋敷町
2　調査期間　一九九七年（平9）八月
3　発掘機関　七尾市教育委員会
4　調査担当者　善端　直
5　遺跡の種類　城下町跡
6　遺跡の年代　一六世紀
7　遺跡及び木簡出土遺構の概要

七尾城下町遺跡は、七尾市街地の南東約三km、七尾市古城町から古屋敷町一帯の山麓部に位置する。同遺跡は、越中と能登の境をなす石動山系の一画に普請された山城「七尾城」跡と連動するもので、街区割りに基づいて形成されている。七尾城と七尾城下町は、戦国期に能登の守護職に補任された畠山氏により構築されたもので、その主要域は東の木落川、西の大谷川に挟まれた約二〇〇haとみられている。

（七　尾）

このうち七尾城跡は、標高約三〇〇mに所在する主郭を軸に、扇を広げたように派生する尾根の自然地形を巧みに利用して普請された連郭式曲輪群で、一九三四年には総石垣造りの主郭九・八haが国史跡に指定されている。一方、七尾城下町遺跡は標高約六〇～四〇mの緩傾斜地に所在するが、現状ではほとんど遺構は露出していない。

七尾城下町遺跡の発掘調査は、一九九一年に城下町口部で行なわれたシッケ地区を最初とする。同調査では一六世紀の町家とみられる遺構群や生活色豊かな遺物群が発見され、七尾城下町の一端をはじめて垣間見ることができた（七尾市教育委員会『七尾城シッケ地区遺跡発掘調査報告書』〈一九九二年〉）。その後、一九九五年度からは、七尾市教育委員会によって城下町の概要の解明を目指した範囲確認調査が開始されている。一九九七年度までの調査の結果、整然と形成された城下町の町並みに、各階層の住民が『独楽亭記』（天文一三年〈一五四四〉）に「千門万戸」と記述された様子を彷彿とさせるような状況で集住させられていたことが明らかになってきた。

今回の調査はこの範囲確認調査の三年めにあたるもので、調査地はシッケ地区の南西約二〇〇mの「西光寺」という地名が伝えられる水田のうち幅三m×長さ二五mの範囲を調査した。その結果、シッケ地区などと同じ方位の礎石建物や屋敷割りの石列、溝や土坑な

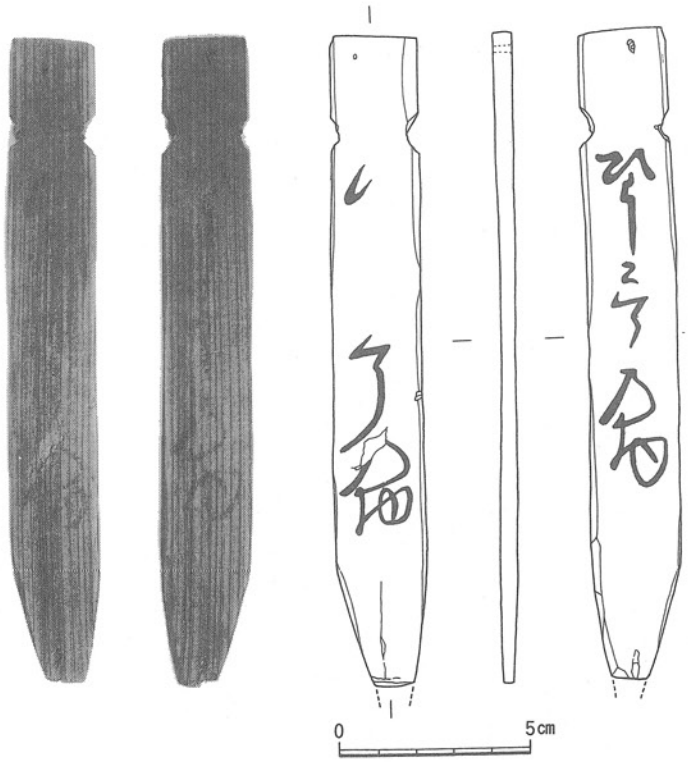
どの遺構群が出土した。

木簡は調査区中央部で検出した土坑状遺構の底部から一点出土した。この遺構は他の遺構と同様に一六世紀のもので、一辺約二m、深さ約一・二mを測り、埋土には性格不明の木片が多く含まれていた。なお、木簡以外の文字資料としては、底部に「吉」と朱書された漆器椀が出土している。

8　木簡の釈文・内容

(1)　・「○〈次郎三郎乃物　　(172)×24×5　033

・「○〈次□三郎乃物

下端の一部が折損している。上端には意図的にあけられた釘孔とみられる痕跡をとどめている。表面の文字は肉眼でもほぼ判読可能であるが、裏面は磨滅や損傷が激しく、判読困難な状態である。

（善端　直）